



品照寺覚円の学問の足跡 ー所蔵典籍の識語を通してー

著者	木本 拓哉
雑誌名	人間文化研究所年報
号	29
ページ	83-93
発行年	2018-08-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000972/

品照寺覚円の学問の足跡

―所蔵典籍の識語を通して―

木本拓哉

はじめに

福岡県朝倉市三奈木にある品照寺（浄土真宗本願寺派）に所蔵されている文化財（古文書、典籍、書画等）の悉皆調査が行われた^①。これを踏まえ寺伝に関して、二冊の本がまとめられている^②。また古文書に関しては、すでにその研究成果が発表されている^③。それを承けて本稿では典籍（版本、写本）について考察するものである。

品照寺には多くの書物が所蔵されていた。版本は一五〇部六三三冊、写本は二一〇部二六八冊で、総数三六〇部九〇一冊である。これは歴史的価値のある史料として朝倉市の文化財指定を受けている。典籍の多くは、蔵書印などから江戸時代後期から明治時代にかけて、歴代住職たちによって蒐集、書写されたものと判明した。それらの書物の大半が仏教経典であった。その他に儒書、史書、神書、歌書なども収蔵されていた。

品照寺がある三奈木についてよく引用される文献に、元禄十六年（一

七〇三）に編纂された貝原益軒の『筑前国続風土記』がある。その中で江戸時代の中頃の三奈木については「下座郡 美奈宜村 参千五百石余 是国中第一の大村なり」（巻二）と書かれている。筑前国の村の中で一番大きかったのが三奈木村であった^④。

その三奈木は筑前黒田藩領である。三奈木の隣に位置する秋月は黒田藩の分家として一つの藩、秋月藩を成していた。三奈木は福岡の城下からみて秋月に奥に位置するが、黒田本藩の支配地であった。そしてそこを治めていたのが加藤氏である。加藤氏は黒田如水に従い博多に入り、黒田藩の家老職にまで上り詰めた家である。家老でありながら黒田姓、並びに三奈木の領地を賜ったので三奈木黒田とも呼ばれている。

三奈木は加藤氏邸宅や家臣団の武家屋敷などもあり、藩内の村落の中でも武士の数が多い地域であった。加藤氏はほとんどを福岡で過ごしていたが、三奈木にも屋敷を構え、時々滞在していた。この屋敷の表通りは現在「札ノ辻」と呼ばれている。高札場があったからそのよ

うに呼ばれていた。品照寺もこの札ノ辻沿いにある。高札場があったということは村の中心地だと考えられる。そしてこの通りは英彦山詣でする人々を通る道としても利用されていた。品照寺のある三奈木の中心部は、村の人々以外にも多くの人が往来する賑やかな場所だったと想像される。

寺伝によれば品照寺は安永九年（一七八〇）の秋に火災に遇っており、本堂の上棟が寛政七年（一七九五）になされている。そのため典籍は、寛政七年以降に歴代住職たちが蒐集したものが大半である。その主な蒐集者は大音、覚円、覚音、覚了の四人である。

大音（？～明治四年（一八七二））は品照寺第十世である。覚円の生没年は未詳であるが、大音の子である。大音の後を継いだのは養子に入った覚音（？～明治二年（一八八八））である。この覚音が品照寺第十一世になる。そして十二世が覚了（？～大正三年（一九一四））である。

今回はこの四人の中でも覚円に着目したい。覚円は第十世大音の子である。しかし住職を継職せず、安政五年に大音の養子となった覚音が第十一世を継いでいる。住職を継職していないため、寺伝の中に覚円についてほとんど書き残されていない。そのため覚円の人物について分からないことが多いのである。典籍以外としては覚円が書写した絵画の粉本が多く残されていた。覚円が絵を得意としていたことが伺える。しかしこれらも粉本類が多く、覚円の活動を詳細に伝えてくれているわけではない。

このように覚円の詳細はよくわからないが、典籍に記されている識

語から僅かながらその足跡を辿ることができる。その足跡を辿り、地方に住む真宗僧侶の学問の様子を復元する作業を試みるのが本論の狙いである。

そこで取り上げるのが識語である。所有者がその書物を入手した経緯について記した文章のことを識語や奥書と呼んでいる。版本が主流となる江戸時代以前は、写本により書物が流通したので、その書物の由緒を示す識語は重要であった。

真宗の出版は江戸時代に入ってから本格的になるので、真宗寺院に所蔵されている書物の多くは江戸時代に流通した版本や、書写された写本となる^⑤。版本にはどこで入手したのか、値段はいくらだったのかなどについて書かれていることが多く、写本には誰の持ち物だったのか、どこで書写したのかということが記されていることが多い。講義録の場合は、講師の名前や講義があった場所についても書かれている。このように識語には多くの情報が含まれており、僧侶の学問活動や行動範囲などを知る手掛かりになると考えられる。そのため、識語を丹念に整理、調査することで所有者の足跡を辿ることができるのである^⑥。

一 覚円の地域修学

末尾の表は覚円が記したと考えられる識語をまとめたものである。この表にした識語は、「覚円記」、「覚円誌」などと明確に覚円が書写、もしくは入手したと書かれているものや、他書の識語などから覚円が

書写したであろうと思われるものだけを採用した。覚円の蔵書印が押されてあるものもあるが、それはその書物が覚円の所有物であることが証明しているにすぎず、記されている識語が覚円のものか判断がつかない。そのため、覚円の蔵書印だけのものは採らなかつたものもある。

覚円の識語で古いものは天保九年（一八三八）のもので、それから安政五年（一八五八）までの識語が残されている。これにより幕末期の二十年間の覚円の学問の足跡を辿ることができる。そして表から分かる通り、覚円の行動は三つに分けることができる。一つ目は周辺寺院での学問、二つ目は糸島での学問、三つ目は学林での学問である。

一つ目の周辺寺院に関するものは、品照寺のある三奈木周辺の寺院での活動や、筑前国の触頭である万行寺での学問について記した識語である。天保九年七月には甘木の教法寺（浄土真宗本願寺派）にて『御絵伝記』の講釈を聞き、その講釈を書き残している。その識語は次の通りである。

天保十一庚子秋七月於甘木晃雲山教法寺講釈覚円記

この写本『御絵伝記』には絵も描かれているので、この頃には絵を得意としていたことが伺える。教法寺は真宗筑前学派の祖とされる大同（享保十三年）没年未詳。号は玄澗。僧樸の門人。教法寺第七世住職。を輩出した寺院でもある。また嘉永元年（一八四八）四月三日には杷木の西宗寺（浄土真宗本願寺派）にて『現世利益和讃考』を書写している。

弘化五年戊申四月三日於光曜山写也

弘化五年二月二十八日に嘉永に改元されている。おそらく改元のことを知らなかつたのであろう。

この二カ寺は甘木と杷木にある寺院なので三奈木周辺の寺院ということが出来るだろう。これにより覚円が品照寺周辺の寺院に赴いて、講義を聞いたり書物を書き写したりしていたことがわかる。

また嘉永二年（一八四九）閏四月三日には万行寺にて玄雄（文化五年）明治十四年。号は蔡華。曇龍の門人。勸学。）による『高層和讃曇鸞章記』の講義が開廷し、その講義録を残している。

講師玄雄和尚 于時嘉永二己酉閏四月三日開筵也 苾芻覚円記

玄雄は宗像正蓮寺（浄土真宗本願寺派）に住持し、大阪専念寺（浄土真宗本願寺派）に転住した人物である。天保十四年（一八四三）五月に司教となり、更に嘉永五年（一八五二）九月十五日に勸学となっている。玄雄は学林にいた当時、曇龍に師事した。曇龍（明和六年）天保十二年。字は子雲、号が龍華。は安芸出身で、大瀧のもとで宗学を学び、文政八年（一八二五）に司教、同十一年（一八二八）に勸学となっている。曇龍は本山の命を受けて文政元年（一八〇四）ごろに万行寺（浄土真宗本願寺派）の住職となり、そこで龍華教校を開いた。もともと曇龍を中心に一つの学派（龍華学派）が形成されている。曇龍の博多入りに従い、その拠点として龍華教校が開かれたようである。曇龍が龍華教校を開いた万行寺で、曇龍門下の玄雄の講義を受けたということは、覚円が龍華学派の学問に触れていたこととなる。

これらにより覚円の地域修学には二つの繋がりがあつたと考えられる。

る。一つは品照寺のある三奈木周辺の繋がりで、もう一つは龍華教校があった万行寺との繋がりである。三奈木周辺の修学からは、地域の僧侶たちと切磋琢磨し、日々研鑽する姿が浮かび上がってくる。これは地域的な広がりであるから、横軸の繋がりとすることができらるう。もう一方の万行寺との繋がりで、万行寺と品照寺とは触頭触次の関係でもあったため、縦軸方向の繋がりとということができらる。そして龍華教校での学びは、京都の学林にも引けを取らない高度なものと考えられる。そこでの学びは覚円にとって刺激的なものであったらう。これは三奈木周辺での地域の仲間と共に学ぶ修学とは違った個人の知識を高める修学である。このように地域修学には二つの軸の繋がりがあったといえるだらう。

もう一つ着目したいのが天保九年（一八三八）の醉古堂で『東遊賦』を書いたことである。

天保九年戊八月三夜於醉古堂積覚円写之

『東遊賦』は亀井昭陽（安永二年～天保七年。諱は昱、字は元鳳、通称は昱太郎。号が昭陽。亀井南冥の息子。福岡藩儒。）が秋月藩の八代目の藩主である黒田長舒（明和二年～文化四年。日向高鍋藩主秋月種茂の次男で、天明五年に秋月藩主の跡を継ぐ。）に付き従い、江戸へ赴いた際にまとめた文章で、それを知人に配布したものである。秋月と亀井家の関係はこの長舒の時に始まる。秋月には稽古館という藩校があった。長舒はそこに福岡藩の藩儒亀井南冥（寛保三年～文化十一年、諱は魯、字は道載。号が南冥。福岡藩学問所である甘棠館の祭酒。）を招聘したり、南冥に学んだ秋月の儒者原古処（明和四年～

文政十年、通称は震平、諱は叔燁、号が古処。）を稽古館訓導に任じ、学問を奨励した。亀井昭陽は南冥の息子である¹⁰。昭陽が知人に配布したということは、所持している人間も限定されていると考えられる。そのため醉古堂も亀井家に縁のある人物に関する場所だと考えられる¹¹。醉古堂は品照寺に所蔵されている墨画「荷を担ぐ人」にも見え、そこには「庚子十月十日遊醉古堂写」と書き込まれている。

二 蓮照寺との関係

覚円の識語みると糸島を頻繁に訪れていることが分かる。糸島とは福岡市の西隣に位置する糸島市のことである。識語には糸島の中でも「稲富」「稲溪」という文字が見える。これは糸島稲留にある蓮照寺を指すと思われる。蓮照寺は浄土真宗本願寺派の寺院で、『筑前國續風土記拾遺』によれば、天文六年（一五三七）に木仏寺号が許されたとされており、また江戸時代には売薬業をしていたとある。品照寺の寺伝によると覚円は、この蓮照寺から妻を迎えているので、姻戚関係にある寺院ということになる¹²。

品照寺と蓮照寺との関係は覚円以前に遡ることができる。これも識語になるが、文化元年（一八〇四）六月に善讓が蓮照寺を訪れているのが確認できる。写本『法華念仏同時之教弁』の識語がそれである。

文化元甲子六月廿九日終於光曜山蓮照寺書之下座郡品照寺善讓什物

善讓も覚円同様、住職を継職していないので詳細が不明な人物であ

る。善譲はその後も糸島を訪れていたようで、文化四年（一八〇七）には同じ糸島の法正寺を訪れて『覚如上人敬白文』を書き写している¹³。これらにより文化年間に善譲は糸島を訪れていたことが分かる。

覚円は残された識語によると四回ほど糸島を訪れている。一度目は天保十二年（一八四一）の十一月である。識語から察するに、この時は十一月から十二月にかけて糸島に滞在していたようである。その拠点となったのが蓮照寺である。識語には「稲富寮」「稲溪寮」という言葉も見えるので、蓮照寺には寮があったのだろう。

写本『十二光勸考』に天保十二年十一月の識語が記されている。

天保十二年辛丑霜月於青龍山金照寺写之彼寺住甚秘故予亦秘之也

これにより、蓮照寺と同じ糸島地区にある金照寺（浄土真宗本願寺派）にて『十二光勸考』を写写していたことが分かる。同じ天保十二年の識語は他にもある。版本『阿毘達磨俱舍論』（全十冊）の三冊目に次のような識語が記されている。

天保十二年辛丑極月十日於稻留求之下座郡蜷城法喜山品照寺覺圓

杜多 代一步二百文

また十冊目には次のような識語が記されている。しかしこれは墨で消されている。

志摩郡御床邑緑森山松雲寺藏書

版本『七十五法名目』には次の識語が記されている。

天保十二年辛丑極月十八日從御床松雲寺於稻溪求之覺円杜多 代

百九拾文

これらの識語より、覚円は蓮照寺において『阿毘達磨俱舍論』を「一步二百文」で、『七十五法名目』を「百九十文」で買い求めたことがわかる。そしてその購入した書物は稲留近くの御床村にある松雲寺（浄土真宗本願寺派）の所蔵書であった。特に『七十五法名目』の識語には「御床松雲寺從り」と書かれているので、松雲寺から直接購入したと推察される。寺院間で書物の貸し借りだけではなく、売買も行われていたことになるだろう。蓮照寺に滞在中に十冊揃いの仏教典籍を購入していることは、蓮照寺の滞在の目的が学問のためであることが分かる。

その後は天保十三年四月、七月に蓮照寺にいたことが分かる識語がある。それは写本『本典筆記』の識語である。

天保十三年壬寅四月十三日写於稲富寮写之終法喜山积氏覚円藏書

そして少し間を置いた弘化四年三月に蓮照寺にいたことが分かる識語がある。それは写本『阿毘達磨俱舍論要録』の識語である。

弘化四丁未三月廿有五日於稻留寮写之也

このように覚円は蓮照寺をたびたび訪れていた。品照寺のある朝倉三奈木を起点に考えると、蓮照寺のある糸島は博多から更に西へ行かねばならない。筑前で一番栄えていた博多にある寺院ではなく、糸島の寺院に赴いたのはそれなりの理由があったのだろう。妻の実家ということも理由の一つであるが、これが大きな要因であるとは考えにくい。もう一つの理由として考えられるのが、蓮照寺が売薬業を営んでいたことである。薬の製造と販売をしていた蓮照寺は、薬剤の納入する人々や薬を買い求める人々で賑わっており、人が集まる場所であ

あつたと考えられる。人が集まる場所ということは、物も集まる場所でもあり、その中に書物も含まれていたと考えられる。書物を探し訪ねることは知識を欲する人々の当然の営みであるため、覚円も書物を求めるために蓮照寺を訪ねたのであろう。

また天保十二年ということも考えねばならない。万行寺に龍華教校を開き指導をしていた曇龍がこの年の八月十一日に学林で入寂している。つまり博多の学問を志す僧侶たちにとって大きな柱となっていた曇龍を失ったわけである。曇龍が博多においてどのような講学活動をしていたのか、博多の万行寺がその拠点だったのか、など龍華教校についてまだ不明なところもあるが、万行寺ではなく蓮照寺に向かった理由の一つに、曇龍の入寂もあつたであらう。

三 密雲と覚円

覚円の識語にたびたび出てくる僧侶がいる。それは密雲という僧侶である。この者に関しては井上哲雄氏の『真宗本派学僧逸伝』にも出てきていないので、詳細が不明な人物である。

品照寺所蔵の版本の中に『十句義論聞記』があり、巻首の執筆者、巻尾、末尾の刊記は次のようになっている。

(巻首) 説者 宝雲大和上 稲溪 密雲筆受

(巻尾) 天保十五甲辰十月二十有八日終之於勸学寮燈下云爾

(刊記) 筑前志摩郡稲留 蓮照寺蔵板

京都書林 取次 六条東中筋魚店上ル 菱屋卯助

巻首の一文は宝雲(寛政三年〜弘化四年、嘉麻郡白井長源寺住職)の論説を密雲が書き起こしたことを意味し、巻尾の一文は天保十五年十月二十八日に学林の勸学寮で書き終えたことを意味する。宝雲は朝倉郡秋月の西念寺に生まれ、長源寺の養子となった人物で、諸国を遊学し、安芸の勸学大乘(慧雲の弟子、安芸阿坂村安養寺住職)に学んだ。学林でも講義をし、勸学にも任じられた。宝雲は曇龍にも学んでいる¹⁴⁾。天保十五年(一八四四)宝雲は学林で「大乘掌珍論」を講義している。ここで挙げた識語は、天保十五年に勸学寮で宝雲より「十句義」についての講義をまとめ上げたということである。そして刊記の「蓮照寺蔵板」から、この本の版權は蓮照寺が持っているということが分かる。この当時、書物を開版することは江戸、京、大坂の三都が中心に行われていた。そのため『十句義論講義』も取次は京都の菱屋卯助となっている。地方寺院が出版するには資金も必要であったはずである。この刊記は蓮照寺の豊かさを示すものでもあろう。

密雲に関して学林関係の史料に次の三つの記事がある¹⁵⁾。

天保十二年(一八四一) 安居 知事

天保十五年(一八四四) 安居 参事『異論宗輪述記』密雲臆満

弘化二年(一八四五) 安居 監事

これにより密雲が学林の知事、参事、監事の職にあつたことが分かる。また天保十五年には安居で講義も行っている。学林の役職に就いていたこと、講義を行っていたことにより密雲は学僧であつたということが出来るだろう。先に挙げた『十句義論聞記』も天保十五年に書き上げたとされている。この時、密雲が京都にいたことは確かかなよう

である。

覚円の識語に、天保十三年五月に密雲の講義を受けたと記したものがあ。写本『文類聚抄筆記』の識語がそれである。

天保十三年壬寅五月廿三日満講密雲親教師説覚円蔵

この識語によると、天保十三年（一八四二）五月二十三日に密雲の講義が終わった。この年、密雲は学林関係の役職には就いていない。また五月前後の識語を考えると、四月と七月に糸島にいたので、この講義は蓮照寺において行われたと思われる。覚円は密雲のもとで学んでいたことになる。蓮照寺は物流が集まる場所でもあったが、そこに書物などの「知」が集まる背景には、密雲の存在があったのだから。書物などの「知」が集まる場所だったゆえ、覚円も蓮照寺に赴いたと考えられる。

四 学林での学び

覚円の識語を見ると、天保年間に京都の本山の学林で学んでいたことが分かる¹⁶。

本願寺が学林を作ったのは寛永十六年（一六三九）である。この時は「学寮」と呼ばれていた。承応二年（一六五三）に宗義争論を起し、幕府より破壊命令が下され、その後、元禄八年（一六九五）に学寮は「学林」として再建された。しかし、これも寛政九年（一七九七）にはじめる三業惑乱により、文化元年（一八〇四）から閉校されたが、文化四年（一八〇七）に再開することになった。

学林は安居制が採用されていた。安居とは僧侶たちがある期間だけ集まって修行をすることである。特に雨後の夏に行くことが多かったので夏安居とも呼ばれている。これを踏まえて、学林では四月中旬より六月下旬までの夏安居を中心に講義が開かれていた。その講義は、十日前後の間だけ行われる集中講義のようなものである。この他にも、秋、冬、春の安居が適宜行われていた。そして三年間、安居に出席することで住職への任命が許可されていた。

三業惑乱以後の学林の組織は、勧学を頂点に、司教、主議、助教、得業の四つの学階が設置されていた。天保三年（一八三二）にはそれぞれの定員も決められ、勧学は六人、司教は十人、助教は五十人、得業は無制限である。そして年預勧学の制度も始められた。勧学の中から一人を、夏からの一年間在寮させ、学林の取り締まりを当たらせた。

覚円の識語によると、天保十四年（一八四三）の六月から七月まで、弘化元年（一八四四）の九月、弘化二年（一八四五）の二月から三月の間、それぞれ学林で学んでいたようである。

天保十四年（一八四三）の識語は写本『二巻鈔私記』に記されており、それは次のようなものである。

天保十四癸卯夏六月十有一日於京西六條学林蓮階北七写之
覚円蔵

六月十一日に学林の蓮階北七で『二巻鈔私記』を書き写した。学林には多くの寮があった。文久二年（一八六二）十一月に越前藩主松平茂昭が上洛した際に宿舍として貸借したことが記録として残されている。そこには勧学寮、司教寮并兼主議寮、南寮、中寮、助教寮、洞院

寮、蓮寮、東寮、閑寮、参事寮、北寮の名前が見られる¹⁷⁾。天保十四年の識語は「蓮階」とあるから、蓮寮のことだろう。翌月の識語にも蓮階の文字が見える。

天保十四年癸卯七月朔日於京都六條学林蓮階写之

これは写本『往生論註聞記』の識語である。これらにより六月から七月にかけて、学林の蓮寮に滞在していたことが分かる。

天保十五年もしばらく学林に滞在して勉学に励んでいた。

天保十五年甲辰年八月朔日開筵苾芻覚円記(写本『往生論註筆記』)

天保十五年辰九月廿日夜於学林北寮写之覚円智通蔵(写本『入出二門偈新記』)

天保十五辰十月八日於北寮写之 沙門覚円蔵(写本『七祖通論』)

この三つの写本の識語から、天保十五年の八月から十月まで学林の北寮に滞在していたことが分かる。そして十二月には学林で密雲の講義を受けている。写本『異部宗論述紀筆記』の識語に次のようにある。

参事密雲親教師之説沙門覚円誌天保十五年辰十二月三日開筵

先に密雲のところで引用しているように、学林関係の史料より、密雲が天保十五年に『異論宗輪述記』の講義をしていた。覚円の識語より、覚円がこの講義を受けていたことがわかる。学林で学ぶ以前に教えを受けた密雲と学林で再会できたことは覚円において心強いことだっただろう。

弘化二年に書写した『信文類三二問答記』には次の識語が記されている。

弘化二巳二月三十日於六条惣会所開筵覚円誌

これにより学林の惣会所で講義を受けていたことが分かる。

もう一つ興味深いのが行信一念などの教学に関して書写した『雜録』の識語である。

弘化二年巳三月二十有三日西江州高嶋郡大満城下於田中山勝安精

舎写是終也 月華園 覚円蔵

これは弘化二年(一八四五)三月の識語である。三月二十三日に近江国高嶋郡大満城下にある勝安寺(浄土真宗本願寺派)にてこれを書き写した。前の二月まで学林で講義を受けていたので、この頃も学林にいたと思われる。学林を拠点に近江まで足を伸ばしていたことになり、近江まで出かけていることは、覚円にとって学林が学びの場という目的地でもあり、修学活動の拠点として性格もあつたことを意味しているだろう。

小結

これまで覚円の学問について、覚円が記した識語を取り上げ、そしてその識語を三つに分類して考えてきた。一つ目は地域講学である。覚円は品照寺ある三奈木周辺の寺院で学んでいた。そこには地理的な横軸の広がり、と、触頭触次という縦軸の広がりがあった。二つ目は糸島地区での学びである。薬の製造販売をしていた蓮照寺を拠点として、周辺の寺院との交流を持ち、また蓮照寺での学びがそこにはあった。学僧密雲との出会いも大きな出来事である。学林で講義をするほどの学僧に直接教えを受けることができたことは覚円にとって貴重な

時間となったであろう。三つ目が学林での学びである。全国から多くの僧侶が集まり切磋琢磨している学林は覚円に大きな刺激を与えたであろう。それは学林だけでなく、京という都市空間も間違えなく刺激を与えたと考えられる。このように三つの場が覚円の学びの場であったこと分かり、覚円の学問の足跡を辿ることができた。

今回識語と整理して新たなことがわかった。それは蓮照寺が学びの場であったということである。蓮照寺から学林への階梯は、筑前における僧侶の修学について新たな視点を我々に提示してくれているだろう。江戸時代後期の筑前は、曇龍という偉大な学僧がいた万行寺を中心に考えがちであるが、蓮照寺という学びの場があったとは、この覚円について考えなければ分からなかった。今後は蓮照寺や糸島地区の寺院調査を行い、当時の様子を説明することが必要となるだろう。

この論考のもう一つの狙いは真宗寺院に所蔵されている典籍に記されている識語からどのようなことが見えてくるのか、ということでもある。品照寺覚円の識語を整理したところ、識語が江戸時代後期の真宗僧侶の学問と行動を探る史料になっていたことが分かる。つまり、典籍類に記されている識語は日記に準ずる史料としての側面があり、僧侶の日々の学問活動を解明する貴重な史料となるわけである。また、寺伝では詳しく語られていない人物の蔵書は、その書物に記されている識語により、その人物について知ることができる。寺伝を補充する史料としての価値も有していることになる。識語の重要性が改めて認識される。このような識語も研究することで、層の厚い真宗史が生まれることになるだろう。

注

(1) 任職である大石大哲氏を調査団長とし、古文書は遠藤一氏、奥本武裕氏、岡村喜史氏、典籍は筆者、書画・美術工芸は小林知美氏、田鍋隆男氏がそれぞれ分担した。

(2) 大石大哲編『品照寺の歩み』(平成二十五年)、大石大哲・遠藤一・奥本武裕・岡村喜史・小林知美・木本拓哉共編著『法喜山品照寺史―品照寺文書を読み解く』(平成三十年)

(3) 中川正法・緒方知美・遠藤一編『九州真宗の源流と水脈』筑紫女学園大学・短期大学部 人間文化研究所叢書1、法蔵館、平成二十六年)、松尾一・大石大哲・岡村喜史・奥本武裕・金龍静「天正十五年本願寺教如九州下向の基礎的研究―朝倉市品照寺文書を中心に―」(『久留米工業高等学校紀要』二十七卷二号、久留米工業高等学校、平成二十六年)、西国真宗史研究会「品照寺所蔵『出入覚書之扣』」(『佛教史研究』五十五号、龍谷大学仏教史研究会、平成二十九年)などがある。

(4) 三奈木に関しては以下を参考にした。『美奈宜』(美奈蠻郷土室、昭和七年〜八年)、古賀益城『あさくら物語』(あさくら物語刊行会、昭和三八年)、『朝倉郡地誌』(福岡県立図書館、平成十八年)、安陪光正『村のくらし―筑前三奈木―』(平成二十一年)。

(5) 真宗と出版に関する先行研究には、浅井了宗「本願寺派に於ける聖教出版の問題」(『龍谷史壇』四四号、一九五八年)、佐々木求巳『真

宗典籍刊行史稿』(伝久寺、一九八八年)、引野亨輔『近世宗教世界における普遍と特殊―真宗信仰を素材として―』(法蔵館、二〇〇七年)、小林准士『三業惑乱と京都本屋仲間』(『書物・出版と社会変容』九号、二〇一〇年)、塩谷菊美『語られた親鸞』(法蔵館、二〇一二年)、万波寿子『近世仏書の文化史 西本願寺教団の出版メディア』(法蔵館、二〇一八年) などがある。

(6) 真宗僧侶の集書活動に関しては引野亨輔「近世真宗僧侶の集書と学問」(『書物・出版と社会変容』三号、二〇〇七年)がある。識語に関する先行研究は、その多くが写本の伝来について考察されたものであり、本稿の意図するところとは違っている。識語から所蔵者の動向を考察したものととして、大沼宜規「旧蔵書の識語にみる木村正辞―書物をめぐる活動記録稿―」(『東洋文庫書報』四〇号、二〇〇八年)がある。

(7) 大同については井上哲雄『真宗本派学僧逸伝』(永田文昌堂、昭和五十四年)の二一四頁を参考にした。

(8) 玄雄についても井上氏の前掲書の九二・九三頁を参考にした。

(9) 曇龍についても井上氏の前掲書の二六五・二六六頁を参考にした。

(10) 亀井南冥・昭陽については荒木見悟『亀井南冥・亀井昭陽』(業書日本思想家二十七、明德出版社、昭和六十三年)、河村敬一『亀井南冥小伝』(花乱社、平成二十七年)を参照。

(11) 秋月と亀井家との繋がりには原古処が有名であるが、亀門の四天王と呼ばれる調黄溪(名は友、字は尚甫。寛政九年(一七九七)―嘉永四年(一八五二))も秋月の人である。『朝倉郷土人物誌』(福岡県朝

倉郡教育会、大正十五年)によると、黄溪は医師である星野陽秋の子である元琳の養子で、十六歳の時に南冥の門に入った。陽秋も南冥の弟子である(『亀井南冥昭陽全集』(第八卷、亀井南冥昭陽全集刊行会、一九八〇)『亀井南冥書簡集』に「星野陽秋宛」がある)。「人物誌」には「醉古先生 霹靂先生を始め南冥先生 昭陽先生詩文集、仙厓文集等の筆写頗る豊富なり」とある。文脈から醉古先生は陽秋を指すと思われる。これを踏まえると醉古堂は黄溪に関わりのあるところとなるだろう。

(12) 蓮照寺については新修志摩町史編集委員会編『新修志摩町史』(平成二十一年)によった。

(13) 識語「于時文化第四卯曆初夏下旬二十有四日 久家浦於法正蘭若書写之 善讓」。

(14) 宝雲についても井上氏の前掲書の二七八・二七九・二八〇頁を参考にした。

(15) 龍谷大学三百五十年史編集委員会編『龍谷大学三百五十年史』(昭和六十二年―平成十二年)による。

(16) 学林については前掲書による。

(17) 学林の寮については前掲書による。

(きもと) たくや…人間文化研究所 客員研究員

○識語による覚田の足跡

天保九年		醉古堂にて『東游賦』を写す
十一年	四月二十七日	南溪『往生礼讚二種深信釈』を写す
十二年	七月	甘木教法寺にて行われた『御絵伝記』の講釈を写す
	八月十五日	道陰説『御文章第一帖十一章講説』を写す
	十一月	飯原金照寺にて『十二光勸考』を写す
	十二月一日	飯原金照寺から『四経勸化略記』を借りる
	十二月十日	稲留にて志摩郡御床松雲寺より『阿毘達磨俱舍論』『俱舍論頌疏』を購入する
	十二月十五日	夜、稲溪寮にて借りた『四経勸化略記』を写す
	十二月十八日	稲溪にて松雲寺より『七十五法名目』を購入する
十三年	四月十三日	糸島稲富寮にて『本典筆記』を写す
	五月十六日	宝雲説『行巻私記』を写す
	五月二十三日	密雲による『文類聚』の講義が終わり、講義録を記す
	七月十二日	稲溪にて『選択本願念仏集筆記』を写す
十四年	六月十一日	学林連階北にて『二巻鈔私記』を写す
	七月一日	学林にて『往生論註聞書』を写す
	十二月九日	密雲の『勝宗十句義論記』の教説を記す
十五年	二月二十一日	肥後浄源寺から岸辺願成寺弁『末代無智章勸録』を借り、写す
	五月一日～二十一日	『阿毘達磨論聴記』の講義を受ける
	七月二日	『阿毘達磨俱舍論』の講義を受ける
	八月一日	『往生論註筆記』の講義が開筵
	九月二十日	学林北寮にて『入出二門偈新記』を写す
	十月八日	北寮にて『七祖通論』を写す
弘化元年	十二月三日	学林参事寮にて密雲による『異部宗論述記』の講義が開筵 受講する
二年	二月十九日	『異部宗論述記筆記』満講
	二月四日～十九日	惣会所梅之間に宝雲の『諸経讚聴記』の講義を受ける
	二月十八日	『親鸞聖人御旧跡廿四輩巡拝記』を入手する
	二月三十日～三月十三日	惣会所にて『信文類三一問答記』の講義を受け、講義録を記す
	三月二十五日	近江国高嶋勝安寺にて教学関係の書物を写す
	十二月九日	『正信念仏偈私記』を写す
三年	九月二十二日	『領解文』を写す
	十二月十九日	『阿毘達磨論卷第八』の講義を受け、その講義録を作る
四年	三月二十五日	稲留寮にて『阿毘達磨俱舍論要録』を写す
嘉永元年	四月三日	杷木西宗寺にて『現世利益和讃考』を写す
	六月二十二日	『往生要集』の講義が開筵し、講義録を記す
二年	閏四月三日	万行寺にて玄雄による『高層和讃曇鸞章記』の講義が開筵し、講義録を記す
三年	二月十九日	弘化二年に受講した『信文類三一問答記』を清書する
	四月六日	宝雲述『本典好密』を写す
	五月二十三日	『宗教一隻眼』を写す
安政五年	五月十二日	『兵術目録』を写す
	九月	六条にて『百坐因縁』を入手する

品照寺覚円の学問の足跡
— 所蔵典籍の識語を通して —

木
本
拓
哉

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報

第二十九号 二〇一八年